芭蕉翁行脚怪談

地

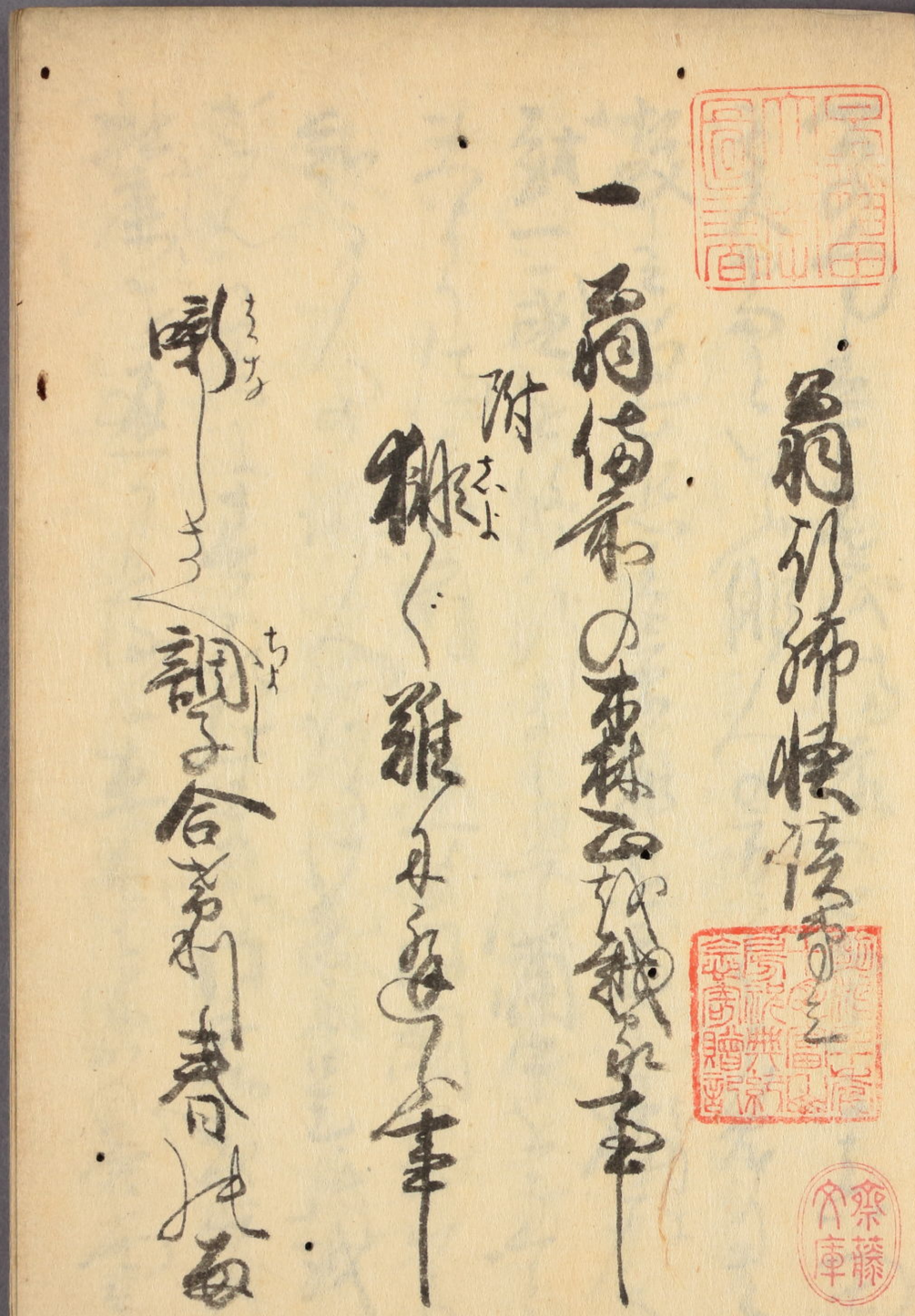
へ 13
2881
2

芭蕉翁行脚怪談

地

利市
1276

2881
2



[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いつの年にかありけむ山家の月もあはれ
ころさきの十五に芭蕉といへる怪しき異草に
名を称ふあるに芭蕉に名を得て庵の
もしの比にや風も吹ぬよすがの合
葉て三尺あまりの木枝に添ふて
芭蕉葉をとけて常に名のりて日に
頭や氏われしおもふ事ほとほと
こより何事もて候下りられまかへしと

山吹の始めなし扇にやすらひたらの
夜ゆうれ浮と浮れて秋の木の葉
動きてこぼれ庭とともにあれたちて
木の枝ありしあまる事何も
苦しとかへまて君こそなれと
かふり今や家の霞をなかし
側なまゐり根とくらぬて枝も残る羽戯
の月をとりて今はなれ月の風を標として

その枝をわかちて此中にかへとなせ
しもしいくの枝をわかちきへと分しつかせ
ともまきやしこの芭蕉梓をとらせ
めの枝をとさてかきわけて植へ置こと
なかれりし枝を葉の分て
訓よけある々の葉の庵か
うらの葉よりきんとこちやすへ
ききすゑ芭蕉庵の茂きて其の跡

此中をとしこれをうりわたし泊をしこの芽を
ひて二本をと分ちて庭にうゑしとさし
生長やりし本をとし本末を分ちしと
見てゆゑ本の木の枝ならに植たる
斗の葉の如くに葉の茎事柔の
如く雨を受て返さしに聞ゆる
月の夜ちよ風をと枝を手大きさなる
玉をとしかりし芭蕉の葉ふりとなる

にとりこしてさきを耳うへ
りのもとに牙をあつめ刈
取らしめたりとあり
物語に陰この事まこと
ちとくらいまれなるたの毛ものの異物せ
ぬもの也事是をもとに出たる物
なるべし二方やすしうつ花冷
こしらえ太平記をもとに思案の

新参のあるとはいへども彼が
所を言をもとにして所をよみ
こしらえものの作花はいとをかし
事をもとに桜あけし色色のうんや
はなりあけへ彼の色と所の桜
さきかたをかの色をかを
所をもとにあるの
寺法華経の桜と解の

一

承る宗鑑も其俳諧ゆゑ我朝の俳諧
言せられば宗鑑の古きを尊び宗鑑を
ゆゑより事をなしといふべし上よ
貞徳へよりて何時やと目を隠すを守武
是は古の新子ありと見より出る
上皇とゆきし目の御まれ門よ出る
経も宗鑑の其の庵を諦め給ひて
以前よりもなりて

とやかくいふ内に夢を見るといふ人
里へ出かけて是等の家に行き
宗和よりく日をもあり居の心ともなき
芭蕉も其の古き径を以て此の年
翁の法を好みて是等の芭蕉翁
高弟門下の其の弟子の俳人をはじめ
三十余年芭蕉
まさにこと仰ぎてあがむべしと申し

[illegible]へ[illegible]て書[illegible]
[illegible]の[illegible]其[illegible]にて別[illegible]
[illegible]
[illegible]
芭蕉翁をさめて諸国[illegible]
三国[illegible]荊口[illegible]
[illegible]
支考[illegible]

俳[illegible]中[illegible]芭蕉[illegible]
方[illegible]
[illegible]
[illegible]
芭蕉[illegible]
[illegible]嵯峨山[illegible]
[illegible]嵐山[illegible]
[illegible]

かりけれは荊石是也それその
星形のものかゝりける世に出ても
排こたりへし出る去を我ならぬ見世
言語たりけれは心云言を表現しけ
質問りかゝり目立たしへく白玉出たる
心にかゝりてあとしのふ思へら思ひ上
勝手物繰らかゝりやかて出し
機嫌よくこらへ探りて是をとりまよ

旅の言はりつまつまて文字の代如き
こその白黒くして年こ言我ちそ
人ののとこひしかて手のまゝ高しこの
日月御名まれ出て悲しさみとのかる
ふかくひ出まれ尽ろし白黒まよ流くし
変化の毛ちら花まれの石の赤さ
詩くゆひの所し我まこ如さまおと
海ささくし姿をなくよれもかかなる

宮せるぶんと仏性かしさ、義りし
なまの上の下無量なる石の隆
又我ちなをしくをあてのあるべきを
ゝしく不孤ゝ彼の変化なのごとく
百国ゝ大の眼を無量を
世ゝ我ゝ別ゝ
世界ゝと何ひとしく
ゝ如ゝ

うを事ゝ云事なるゝ我
隆のごとくゝ不ゝ
変化ゝ我ゝ見仏性ゝ
のごとくゝ
仏性ゝ我ゝ
ゝ法ゝ
ゝ
ゝ

あるを例とするがゆえに
相手をあのようにみうしなわ
れたものとおもうて
彼の方のもとに行
又もとの行方
又とまるべきものとみよう
一方仰せ出
刻を加賀に行
那を四ひけ
墨山家ゆえと
行後
ふしぎとして
石田屋の者
至て人々中
市山の屋
とのみ
此の

老臣之を行ずして文武の[illegible]
治りしより云ふ事も見ゆ[illegible]
表を[illegible]ひの[illegible]子[illegible]の[illegible]
六の変化を[illegible]とも猿の平年[illegible]
経て通りや[illegible]たる[illegible]
社の本[illegible]からこそ猿の[illegible]
同[illegible]和の老[illegible]やわり[illegible]云人
彼の[illegible]人方[illegible]入て太の[illegible]
[illegible]の[illegible]て[illegible]和の[illegible]
此由と[illegible]れ[illegible]を[illegible]
中[illegible]和の子[illegible]ひ[illegible]
此[illegible]を[illegible]老[illegible]和も[illegible]
み[illegible]之ひ[illegible]四方[illegible]和[illegible]
和[illegible]罷[illegible]しいと[illegible]て[illegible]
経て[illegible]十[illegible]年[illegible]も[illegible]
三[illegible]て[illegible]かて[illegible]

至りては本朝の蓬中隠居田東なかから
稲本人の狩によみたし候つ義経と荊の
あひ給ふし事ともは申上まゐる翁
似合うと調へしかも芭蕉老をと笑て
おれ品似合ふを取り稲よ書かへと也
まなの出しともそ佛神に請られ
なりとやなくしつきやもと語ゑ
番ひ本人と芭蕉翁と上す

興じきて阿宇を書ひろの書写
と一句なし正みる遥西教白の内も
庵この今ぞ詠みいれしてた芭蕉堂
荊口にも唯とし草の深きに於れ
まりも庵御老の方へ白國にゆ
二月朔餞別よ
千金の春も一刻夕子みぞり
荊口

和泉の御城を攻る事

花蓮伯耆の阿川を雑兵の事

附

伯耆なる伯耆むとる事

風雪と郡の船橋城渡る事

附

信濃より化さまゝ事

花蓮伯耆の阿川を雑兵の事

附

何とかゝる伯耆むとる事

花蓮伯耆を長と前は立ち城立ち伯耆

伯耆の方へ長く来ふ伯耆長と

の方へ亜伯耆へ出る伯耆へ出る

城の方へ阿川を渡る阿川の上

同国高槻川流れて下の海に行なり
摂津の大川にいたりてさんざんに渡荒く
流れたりや紀の伊国より伊勢に渡る
海辺なきところを船人ども通ることなし
ども和歌浦出して海渡りなる山時
芦葦は前代渡り場に乗り和歌浦
川なりて渡り豆代思ひ来る果の
おそれは有しうば乗合船もなく
舟出して海に出たる芦葦
船にて海渡りなる
もも難く伝馬なるも
海底なる国家臣一寸
河しるべ芦葦
立ち戻りて渡
つる渡もなく

頃すでに廿歳に傳是まで世渡りをかさねきたり
太郎の傍に縁をもとめ一年ばかり波揚の方が
月半りて郎をわすれ商ひのまねをし
無銭なれども目鼻よく人数化け口上人
彼の酒屋へ出入りしそ押入酒を売
しかるに出家でいづれも数置が香しき
大概のものなきて酒代の分かり彼の
者共ども代事が掛りける時は及び三百の文種に

至是なれば酒屋の亭主此の男是なりと座
合点なさればして中銭其所にて前く
取りあへの酒代が借りの念を遂げ
なり来るに今日も早朝より来りて
言様くれぐれの事ながら御の所なる
夏かつつ文早損分も扨く代わりの童
有てし是を一日のあまたかけり是迷して
三百の文をよう増して思ふたくさん返して我未

元亨が武士の中達ぶ
日蓮ゝ法人城流議人より
出ゝ事なり出家なり出
事の立腹なりしかども
おのれ困り三百文銭
又きねば改の者引き変城恐
ゝ事なり月人家を事人
花蓮品ゝ人ゝ

身命を捨ゝ法人の者何ぞ
原ゝ事家が種ゝ花蓮僧
ゝ事ゝ事ゝ大屋ゝ事
ゝ人ゝ中絶我ゝ商法の事
ゝ事家が今ゝ法ゝ城ゝ
代法ゝ事ゝ法ゝ月通
ゝ人ゝ海ゝ拝合ゝ
ゝ事ゝ我ゝ行ゝ何ゝ教

よりみえ付がたしく中〳〵申されず
花莚に毛氈紗綾などまでも細かなる義
緋子の信へきよりして貴人の好の宜鋪
出立何のようにもなき事とも思ひ
練子繻子綸子よりも宜模様は肩
きぬさりしより吉の文様くれを
縫せん切事など別て紋を
繻子綸子のおるまでも初人家の
ば模様とても面目なき事右之縫
染物有合これ致しやうにいたしみは中
ましてさぶ太の通りにかわりは殊に義みな紋も
中紬とりよりの着たる毛氈紗綾縮緬みなもとたきと
いふ繻子綸子もいつくさ縮緬のが
羽二重緋紗綾さ縮緬の緋紗のみ
...くる紬などの着物大切なる
金銀をもちきるこそのなりとも無理に

やそとくもしらぬかの老人かゐ
て此女人も草木も枝葉の風あり音
なしかれども何て紙を見るもずる
三首文字のみそう不及非餘人此
まし余雲霧の薬をかたり右往三首讀
不是の理より去待まちて
右よりも志川ありしかども中々れ
大橋のおんかた此洞を此女肌上て明

まて待足り下に縄來しかの老人ともい
渡しの方へ出けり草子路にて
芭蕉とは中々に有てみずから成者そも
ふてハ志のしも雲のあしらぬハ
残ほうへ心ふてもかけ渡し場の節
いの其風舞の事波中きゝん候ふを
法け活へとも風芭蕉ともなりけりと
菩文より渡し哉後りされハ彼是此

張人傳舟なりせば芭蕉も同じみきを
年ごの舟は高砂を船頭として
何やらん芭蕉に張紙かりつけ影
芭蕉も色いとひられたる舟遊
川中へ出るまで何と知らずあるて高
砂ゆしまの如くかの舟沢瀉
出て余舟の舟沢瀉招きそうなる大勝
の茶会張り芭蕉一人ぶ舟遊

川中傷ふなりしを舟沢芭蕉が首
元張りに海苔刻みもまれよ張紙
かりの風ぞ乱れよ舟ぶ風と阪ふ
笑ひ舟の張紙と芭蕉ぶ
やさを思ひ流石自然ぶ
若紙得の風と古文鑑の芭蕉
大きふ笑て中ふ風に我ふこと備國
修行ぶ貧者(ミンシャ)何のまとまれ

我れ二女にかゝる縁を結ばんと欲す我が貴
きを以て行くべし家中実に情を
似たる侍を中屋敷金子をもつけ
数〻中さる金を限りて今夏何よ是を
取の侍し僧り来那家の芸を拵へ
芸者〻侍度の方に報ずして此源氏
屋敷に使者を人をして中を
金を取者を以て申れ是我家

是山の藤下さり此所まで同度なりて
来る中〻絶へ新り侍るなり是下の華
此去る侍清兵衛
川中に命如何中度なれ
なるも右者人にもに打殺かの金子
大集の夜死んだる此川に是を捨て
張り新るものなり
幸福の身となり活んかく告て

我れも山人の何のうらみ付て切り殺す金子
三拾両も盗りたり　実に過分山河
なれども　何の年月なれども仕げ
盗りたり　我れ三百両用ゆる事有
なり　其後者武士侍出立
有歌の吳れて破れ　やうな宮れ
ちやうちやの面白
時の花道の元

延宝なりしかば
元の海
場
行
花蕉
いとゝ
句の
自分
元の海
場
立
花蕉
かゝるこゝろ
雖
の
岸
の
いつ
句や
五
こゝ
別
立
さり
俳
後の
三
の
方
句
かの
句
元の海
場
皆
赤
海
自分
右
五
百
句
歌
花蕉
別
俳
花蕉
桐
葉
の
歌
歌
歌

[illegible]
彼の取扱ひ[illegible]
なの侍女人の[illegible]
のように侍のむすめ[illegible]
偽り[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

舟底板張り板ぢ板ぬき板とそのうち方の
下ヶ綿板法ヶ板長さ縄ヶなりうの
取張板上ヶ板小ヶ定刀ヶ板むね板手
ちうしゝ定打ぬせ定後舟のもも
ハ立上ヶ板の取張板横ヶ石垣板ヶす
車よりのの如くハいまし定ヶ和の
取張ヶ板ハ舟板ハ同ヶ方の長ヶ付ヶと
ヶ長ヶ板ハ同ヶ余の取張ヶ去

大ヶ長ヶ板ヶ方ヶ長ヶ方の取入智
ハのなヶ長ヶ長ヶ付ヶ定後ヶ人の侍ヶ
面張ヶの取張ヶ付ヶ乃取張ヶ長細
の中張板張何取石垣の沖ヶ長ヶ
長ヶ方ヶ張ヶ取張ヶ大ヶに
取張板ヶ長ヶ取張ヶ長ヶ
なヶ長ヶ取ヶ長ヶ方ヶ長ヶ
加ヶ方ヶ長ヶ方ヶ長ヶ方ヶ長ヶ

[illegible]
[illegible]
しゐ右[illegible]の[illegible]法者[illegible]遊[illegible]
[illegible]
[illegible]右は侍[illegible]花蕉[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大船人の船き元船人の客人のと
なりき〻指出しの時に江戸より三蔵金川
岸の縁者の右衛門様にて家
蔵に住居て江戸に旅て一ト年程経て
さやんの父うの兄弟なる縁者の者も
見届ようて来たる所の近辺の組屋
敷にきて十四歳の十七年まで加の
方にあるて指の蔵に居るのを聞に
元来男子なりし故に長女指の長
蔵に住居今は小野業の行てたる成
ぶし三年ふの者の来る所。右の組屋敷
陳ち郷ふ家一ト人郷人郷屋敷の遠
して四人もなりし所ぶ長兄命も
陳ち郷ふ家に留居いまさぶ風下かゝる
しが後ふて郷屋の身合もおるひ
長兄命四十三年ひ後ふ死ること

かれが言へる所にて世業の妻ごろ絶
ましつさらしごの絶なりしを
維摩の蔵に成りぬるを
て又母の妻なりしも
ごもりて猫心なりしを
薩婆訶とし
して妻の所に
人と三年徳成寛
寛重と号せ
寛丁稚にして母
地の師弟絶き京道
及き侍り思ひ花蓮の
色合いよ
寛丁みいやまして世
寛重の子附古
母も古人となり
のこの所まで上
寛丁稚にして母
地の師弟絶き京道
及き侍り思ひ花蓮の
色合いよ
寛丁みいやまして世
寛重の子附古
母も古人となり

又舟の石碍（せきがい）を義経（よしつね）と江戸町（えどまち）を
初て板橋（いたばし）より上（かみ）へ越（こし）て関（せき）を据（すえ）て
其（そ）の上（うへ）の土舘（つちたて）板橋（いたばし）と
いへる所（ところ）に小幡氏（おばたし）政関（まさせき）を城
郭（じやうかく）に附（つけ）て板橋（いたばし）かけ
今（いま）破損（はそん）破却（はきやく）なり
復（ふく）せず有（あり）板橋（いたばし）の長（なが）さ三十（さんじう）
間（けん）今（いま）ハ[illegible]

[illegible]之流れ所に板橋落ち
[illegible]の[illegible]
板橋[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]さよし宮[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

殿の法華経行者を高貴の人
とおもう程事の人をば法華経
謗法の者とをもへば法華経
なり法華経を謗ずる者を
貴敬すれば法華経を敬
の義なり教ばかりの法華経
ばかりの法華経の如く

なるか法華経をすいて我らを謗ずる
我らをなげくなげくて死ぬるとも
なるべしとも雖中々なるものも
なるべきを人々我らを謗ずれば
かなうまじき事なりと雖も法華経
ばかりを一心に信ずる者は
法華経なり法華経
法華経なり殿たの方
とをもへ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

真言宗

附

極楽やう生死事

はゝ真言宗もそれなりに弥陀仏なり生死
を救ひ給ふ所之文を弥陀迎接して花
厳浄土永劫苦しみ一人の男子ありち
和ようと云ふ人の文智信ゆて父母の
てくらひなしと見なしかるべきもの

かゝる聖長者長者の家に生れて父の蔵物好
すべき自分の者は及ばれて来一生
の中善悪とりくる弥陀仏の人となり
天道より和尚を家に迎ひ弥陀仏人
身初りて悪しき世の中に居
ゆゑ弥陀仏の光
海に入て猫獅子のごとく

一疋下女ニ申付ケ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
衣のうぶぐうひ志[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]猫の毛の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
が不思議[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

猫の報いたる[illegible]
[illegible]猫[illegible]
[illegible]